

特集：県版レッドリスト改訂中！

県版レッドリスト改訂：無脊椎動物編

須賀 丈

昆虫・クモ・貝などの無脊椎動物は、種の多様性がきわめて大きいグループです。世界的にも国内でもその全体像は未解明で、存在自体がまだ知られていない種も多いとされています。絶滅の危険性の評価のためには分布や生態、減少の実態などを知ることが必要ですが、それがわかっているのは無脊椎動物のごく一部です。そのため無脊椎動物のレッドリストは世界的に過少評価とされています。日本や長野県も例外ではありません。



写真1 オオルリシジミ 草原性。前回の県版 RDB(2004) で絶滅危惧 IB 類。

それでも前回の県版レッドデータブックは大きな一歩でした。これによって始めて、どの分類群の状況がよくわかっているのか、またいないのが整理できました。県の条例などによる保全活動にも役立てられました。特にチョウ類では、長年にわたる多くの研究者のデータの蓄積が保全にも非常に役立つことがわかりました。たとえばチョウ類で絶滅の危険度が高いとされたものの大部分は草原性の種でした。火入れ・採草などで維持されてきた半自然草原の保全が緊急の課題であることがこれでわかりました。一方では不十分なデータと知見で評価せざるをえなかった分類群もありました。その後、一部の種では生息状況が変化しました。2012年に公表された環境省の第4次レッドリストでは昆虫と貝の掲載種数が大きく増えました。こうしたこれまでの経験



写真2 オオチャイロハナムグリ 原生林にすむ。
前回の県版 RDB(2004) で絶滅危惧 I 類。



写真3 ミヤマシジミ 草原性。前回の県版 RDB(2004) で準絶滅危惧。

を活かし、新しい知見をとりいれて改訂をすすめなければなりません。

そこで今回の改訂では3つ目標をかかげました。(1)より多くの人により多くの知見を集め、継承できるよう生息記録のデータベース化をすすめること。(2)これらを集約して各分類群のあいだで基準をそろえ、できるだけ定量的な評価をめざすこと。(3)種の生息環境と脅威となる要因を植物、脊椎動物との共通のコード番号で整理し、生物多様性の総合的な現状評価につなげること。



写真4 クロマルハナバチ 環境省の第4次リストに掲載。県内にも生息。

このような目標のもと各分類群の専門家の調査と情報の整理が活発にすすめられています。たとえば甲虫類では信州甲虫研究会により生息記録のデータベース化が大きく進展しています。ガ類では飯田市美術博物館の四方圭一郎さんの現地調査によりこれまで国内で未記録だったキリガミネアツバが発見されました。ハチ・アリ類では環境省のリスト掲載種が大きく増えたため、それらの種の県内の生息状況の把握を信州大学の小松貴さんを中心にするめています。このような成果をもとに新しいレッドリストをお示しできる日が楽しみです。